

教材研究と教材の扱い方(11)

—「春はあけぼの」(『枕草子』第一段)—

菅原敬三

一

枕草子、第一段「春はあけぼの」の教材研究と教材の扱い方について考えてみたい。
本文は次のとおりである。

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎはすこし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ。螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るもをかし。

秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日の

入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わろし。

(日本古典文学大系『枕草子』池田亀鑑、岸上慎二、岩波書店刊)

一一

この章段は、古典の作品の中でも特に人口に膾炙した章段であり、古文の授業で習わない生徒がいらないといつても過言ではない。中には、中学校でも高等学校でも習ったという生徒がいるほどである。

手垢にまみれた感のある教材だけに、教材研究の難しさ

を味わい教材の扱い方に苦勞する。この教材のどこが問題点となり、どういう点が教材としての価値になるか、そして、どういう教材の扱い方が考えられるのか、考察してみたい。

*

一読者として枕草子のこの章段を目にした人物は、きつと驚いたに違いない。「春はあけぼの」という表現は一般的ではないからである。「春は」という主部に対して「あけぼの」という述部で結ぶ表現方法が一般的ではないこと。また、「あけぼの」という言葉も耳慣れないものであったからである。

この二点に関しては、次のようなことが言える。

「春は」に対して「あけぼの」という結びは一般的ではないと言ったが、例えば「川は」とくれば「桂川、隅田川」、「山は」とくれば「比叡山」などとくれば常識的な結びつきとなる。川や山の概念に所属する言葉が述部として続くからである。枕草子の他の章段でも「くは」と書き出すものがある。例えば、自然に関しては「山は」(第十段)「峰は」(第十一段)「原は」(第十二段)など、動物に關しては「牛は」(第三十三段)「馬は」(第三十四段)「虫は」(第五十段)など多数挙げられている。これらの章段では、提示された主部に対して、主部の概念に所属するそれぞれの山や峰が示されている。また、第一段と同じ四季

に關して述べられている第二百一段の「冬は」、また第二百二十二段の「夏は」の場合でも、「冬は、いみじく寒き」であり「夏は、世に知らず暑き」となっている。これらは「冬」に対して「いみじく寒き」は意味内容としての主述の呼応は自然なものであり、「夏は」にしても同様なことが言える。

第一段の特異性は分かって頂けたと思うが、「春は」に対して「あけぼの」とは決して自然な結びつきとはならないのである。そして、「春は、あけぼの」と結論付けられると、読者としては「なぜ」と思わざるをえない。つまり、「春は」と「あけぼの」との間には、両者が結びつくための説明が要るのである。そこが作者の巧みなどころであるが、第一文を読めば必然的に第二文を読まざるをえないという構成になっている。また、第一文の結論に対して、第二文以下の説明をすべて読まなければ、第一文の結論には至らないということになるのは、「夏は」「秋は」「冬は」の各項の文章とも同じである。

次に考えておかなければならないことは、文章論的な問題である。授業で教師が「『春はあけぼの』の後には、どのような言葉が省略されていますか」と尋ね、生徒に「をかし」や「いと、をかし」、「こそ、をかしけれ」を答えさせるということをよくする。しかし、私は、このことに大きな疑問を感じている。なぜこういうことをしてしまう

のかと言え、春はあけぼの」という表現が、表現として落ちつかないからであろう。主述を整理した形で理解したいという読み手の都合があるように思う。では、「春はあけぼの、いとをかし」や「春はあけぼのこそをかしけれ」がおかしいのかと尋ねられれば、それはおかしいことではない。

しかし、「春は、あけぼの」と言い切っていることを、「春はあけぼの、いとをかし」や「春はあけぼのこそをかしけれ」と言葉を補って読むことに問題があるように思う。私は「春は、あけぼの」は「春は、あけぼの」でなければならぬと思つてゐる。「春は、あけぼの」で主述が整い完結しているのであつて、不要な言葉は補わない方がいいのではないか。言葉を補つて読むことよりは、第一文の表現効果を考え、第一文と第二文（または、第二文以下の文章）との関係を考えさせる方向で授業を組み立てる方が、課題が設定できて有効であろう。

次に、「あけぼの」という言葉であるが、朝早い時間を表す言葉としては、「あかつき」が一般的であつた。

朝早い時間を表す言葉としては「あかつき」以外でも、「あけがた」「あさほらけ」「つとめて」など多数の言葉が存在していた。では、「あかつき」と「あけぼの」とはどことが異なるのかと言われれば、結論を出すことは難しい。ただ、清少納言が持つていた「あけぼの」に対する意識は

探れそうである。それは、第二文に書かれている「やうやう白くなりゆく、山ぎはすこし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」から伺えるように思う。ここに書かれている要素に、何があるか探ってみると二つのことが判明する。つまり、時間的要素と色彩的要素である。「あけぼの」という言葉は、当時の人間が共通の意味内容を把握していたかどうかは我々にとつて不明であるが、清少納言としては時間と色彩という二つの要素を盛り込んだことになる。朝まだきの闇の世界が、朝の到来とともに次第に明けていき、時間の経過とともに少しずつ白みを増してくる。それが顕著に現れるのは山の稜線である。「やうやう白くなりゆく、山ぎはすこし明りて」とは、それを表している。そして、しだいに空が赤みを増してゆき、陽光に照らし出された雲が紫がかつてくる。時間と色彩、その全てを含んで清少納言の言う「あけぼの」となるのである。

「春は、あけぼの」と言い切つた表現の簡潔さ、それに続けて「やうやう白くなりゆく、山ぎはすこし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」と表現した描写の巧みさが、この文章の真骨頂であろう。そして、第一文と第二文が結びついて一つの美的世界を構築している。見事としか言いようのない文章力であり、作品である。我々としては、いろいろな言葉を補うより、そのままの表現を味わう方が良いでしょう。

夏の条の問題点を考えてみたい。本文は次のようになっている。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ。螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るもをかし。

「夏は、夜」という結論に対して、幾つの条件を示しているかと言えば、三つである。「月の頃はさらなり」、「闇もなほ」、「雨など降るもをかし」である。この条の読解では、結論と条件との関係を、また条件の数を考えさせることが問題となる。次いで、「螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし」が、前の「月の頃はさらなり。闇もなほ」とどういう関係になっているのかを考えていくことが大切なこととなる。螢の景色を「月の頃」と「闇」の両方にかけるか、「闇」夜の景色だけに限るかということである。私は螢の景色を「闇」夜だけの景色ととる方が良いと思っている。それは、「月の頃はさらなり」という表現がその根拠であるが、「さらなり」（「いうまでもない」の意）という言葉は後の説明を省略してしまうほどの強さを持っている。月が出ている時の景色のすばらしさは、読者の方々が先刻ご承知のとおりですと解釈できる。それに対して、闇夜の場合

はどうなるかと言えば、闇だけでもいい、螢が飛んでいる場合でもすばらしいとなるのではないかと思う。「闇」と「螢」の対比を強調して読む方が私には面白く読める。「闇もなほ」の「も」は、確かに「月の頃」と並列したものととして読むこともできるが、「なほ」（「やはり」の意）と「螢の多く飛びちがひたる」との結びつきを強めて読む方がイメージし易い。「月の頃」の対として「闇」がまず提示された。それが読者の心に定着した後で、闇とは全く逆のことを清少納言が連想して「螢」を提示したのではないかと読む訳である。闇も闇夜の螢もともに夏の夜のすばらしさを醸しだしているのである。

次いで、「月の頃」と「闇」と「雨など降る」がどういう関係になっているのかを考えなければならぬ。「月の頃」とは、「満月」という解釈もあるが、一般的には「月の出ている頃」と解釈されている。「月の頃」と「闇」との構成軸は時間である。月の周期を時間の流れで見えていくと、「月の頃」と「闇（新月の頃）」となる。そして、時間軸の次に用意されているのが天象の軸である、晴れ（夏の夜の曇りは晴れと雨にまたがり表現しづらいとして、避けたと解釈できる）と「雨」である。構成軸の違いこそあれ、「月の頃」と「闇」と「雨」が揃えば、夏の夜の景色は全て網羅できることになる。「夏は夜」と言い切って、全ての夜の景色を短い表現で言い尽くしている。配慮の行き届

いた表現と言わざるをえない。

秋の条の問題点を考えてみたい。本文は次のようになっている。

秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日の入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

ここで、注意しなければならないことは、「秋」と「冬」の条は「春」と「夏」の条と構成が異なっているという点である。春と夏とはそれぞれ「あけぼの」と「夜」の範囲内の事柄を述べていたのに比べて、秋と冬の条では「夕暮れ」と「つとめて」の時間を延長して、「日入り果てて」、「昼になりて」の事柄が述べられている。しかし、読んでいて不自然な感じを受けない。それは、「日入り果てて」、「昼になりて」のところで述べられている事柄が、それ以前に述べられている事柄とイメージ的に繋がっているからである。

さて、秋の条の第二文目であるが、「夕日のさして、山

の端いと近うなりたるに」は時間軸による表現である。そしてそれに続く表現は「春」「夏」の項と同じで情景となっている。しかし、その美的情景として登場したのが「鳥」というのは、日本文学の歴史の中でも希有な例であろう。清少納言に叙述上の計算があるとして、それを我々が想像することが許されるのならば、秋の夕暮れの景色は一般的に忌み嫌われる「鳥」でさえも美的なものとして吸収してしまうのだ、それほどすばらしいものだというメッセージを読み取ることができる。それは「(飛びいそぐ)さへ、あはれなり」(傍点筆者)という表現によっても明らかである。また、「鳥」を出したが故に、続く描写の「まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。」が陳腐にならずにすんだ。美醜合わせることによって、よけいに美的要素を強めるといふ計算さえ読み取ることもできよう。「雁」だけなら秋の風情を表すものとして定着しているだけに、却って平板な表現になってしまっただろう。

情景として「鳥」「雁」を出しているが、この中にも細かい工夫が凝らされている。「(鳥の寝どころへ)行く」「(三つ四つ、二つ、三つなど)飛びいそぐ」という動的表現を加えた点である。読者は秋の情景として「鳥」や「雁」の姿を眺めている訳であるが、時間をかけて鳥の群れが「寝どころ」に「飛びいそぐ」姿や「雁の列ねたる」姿の

移動に目を凝らすのである。時間をかけて情景に見入れれば見入るほど、「秋は夕暮」と言い切れる程秋の情景のすばらしさが定着することになる。

次いで、「日入りはてて」となるのだが、ここが無理なく読めるのは、「夕暮」から叙述が時間的に継続しているからである。そして、視覚から聴覚へと叙述を変化させて、「風の音、虫の音」の記述となる。ここで、視点を交えてちよつとした実験をしてみると面白い。「風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず」は何についての記述か、述部から主部を想像すれば、どういう主部が来ることになるかということである。当然「秋は夕暮」とはならず、「秋の風情」を意味する言葉が主部とならなければならぬのである。しかし、我々が自然に読めるのは、清少納言の文章力だけでなく、どのような文章であれ叙述そのものは時間を追って読んでいくしかないからである。「夕暮」から「日入りはてて」と時間的につながっているから、読者である我々は体よく読まされてしまい、その結果騙されてしまふのである。清少納言の文章力に頷き敬服するしかない。

冬の条に移りたい。本文は次のとおりである。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼

になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わろし。

春夏秋冬それぞれの良さを一言で言うと、清少納言の場合、冬は「つとめて（早朝）」ということになるのであろう。その理由として述べられるのは、春夏秋と一転して屋内のこととなる。厳冬期の山深い自然の美しさを見ることなど、当時の女性には及びもつかないことであろうから、屋内から身近に眺められる景色に目がいくのは自然のことであろう。「雪の降りたる」景色は、当時としても一般的に高く評価された景色であった。雪の降り積もった景色は、雪がいつも降ることのない地方の者にとっては、それだけで目を奪われるほどの美しいものとなる。従って、「言ふべきにもあらず」ということになる。次の「霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。」というところに清少納言の独自性がある。清少納言によれば、「霜のいと白きも、またさらでも、いと寒き」朝が冬に最もふさわしい条件となる。こういう身震いするほどの寒さに目がいくのは、若い感性が作用するからではないかと思う。寒さに負けない清少納言の若いエネルギーが感じられるのは、私だけであろうか。私はこの第一段は彼女の若い頃の感性を思い出した作品ではないかと勝手に想像している。寒い朝を尊重

するが故に、「昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わろし。」となる訳である。第一段を総括する表現として「わろし」という言葉を選んだことに関して、萩谷朴氏は次のように述べている。

本段全般の「をかし」「あはれ」「つきづきし」という肯定的な批評を、最後には「わろし」という否定的評語で締めくくる。反転屈折の叙法である。

(新潮日本古典集成「枕草子」上、第一段頭注)

以上のように、この本文には様々な工夫が凝らされている。

三

以上のような教材研究とは別に次のような読みもある。少々長くなるが、全文を引用する。

「季節のなかに生きること」

辻 邦生

最近、世界中が異常気象だ。日本も去年は冷夏で、米も不作だったが、この夏は観測史上の記録的暑さだった。アメリカも、ヨーロッパも酷暑だった。どうも環境破壊と無関係とは思えない。四季のめぐりが時どきおかしくなるのも、オゾン層の破壊などの影響をうけるのだろう。

季節が季節らしさを失って、異常気象になると、つくづ

く季節がごく自然にめぐっていたノーマルな時代がなくなってしまう。もともと日本は実に微妙な四季の変化に恵まれた国だった。一度、熱帯の国々を旅してみると、四季があることの有難さが身に染みる。

旅をしないまでも、昨年のように冷夏になって、びしょびしょ長雨に降られたりすると、はじめて青空に輝く烈日が懐かしくなる。ごくノーマルな夏なら、夏は暑いに越したことはない。夏が暑いからこそ、かき氷のうまさも、すだれを吹く風の涼しさも、人生の極楽と感ぜられる。現代人はこの楽しさを棄てて、冷房のなかの暮らしを快適とするが、あの単一無機質な涼しさは、不自然で身体によくないだけではなく、この生きる豊かな楽しさを完全に忘れさせている。

年末に徐々に『枕草子』を読み返したが、そこに書かれているのは、四季折々の生きる歓喜といったものだ。私は中学の頃からよく読まされたが、清少納言が、生の歓喜に、これほど陶然と酔いしれている人であるとは、ついぞ考えたことはなかった。ある意味で、『枕草子』は地上に生きる幸福を微細に数えあげ、それをわれわれに教える「幸福の教典」といつてもいいものだ。

有名な冒頭の「春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる」という一節は、もうすでに、花の香りのする春

の夜明けの、次第に明るくなる情景が、それだけで、何か物狂おしい嬉しさを呼び起こす、ということをしているのである。もちろん清少納言は梅も好きだったろうし、春霞に心をひかれただろう。だが胸を喜びで強くしめつけるのは、まず春の典雅な夜明けの、とくに山際の白くなってゆく空に紫の雲のかかる姿なのだ。

彼女の心をときめかせる夏の風物は「夜」「月の頃」である。闇のなかを飛ぶ蛍の華麗なかなさは、どんなに彼女の胸に染みただであろうか。また秋の夕暮れの空を仰いで、鴉が水平に飛んでゆくのを「みつよつ、ふたつみつなど」とびいそぐさへあはれなり」と見つめている心には、まるでマーラーの第三番の哀傷深い終楽章が消えてゆくような感じさえる。

清少納言は古来理想的な才女という評判を得ている。「枕草子」もするどい批判の針を含んだ人生の書だとするのが普通だ。しかし四季の折々に自然と人事がもたらしてくれる生の楽しさを、おいしい飲みもののように味わっている彼女が見えるようになると、清少納言が理性のひとであるよりは、微妙な感じ方を楽しむ感性の人であることが分ってくる。一見自分の好き嫌いで「をかし」「わろし」と書いているが、それは価値評価ではなく、喜びがどんなものに最も強烈に感じられるか、の告白と見られるべきものだろう。

日常の暮らしのなかにも、彼女は実に細かく喜びを感じている。たとえば「市」づくし、「峰」づくし、「家」づくしなどは好きな市、気に入った峰、家のレパートリーだし、「降るものは、雪。霰。霰はにくけれど、白き雪のまじりて降る、をかし」などを見れば、清少納言が少女のように胸をはずませて雪に見入る姿が目に見えよ。「枕草子」を読み終えて思ったのは、季節の移り変りを、あたかもスクリーンに映る美しい映像のように眺めた日本人の心の豊かさであった。まずそこには、虚栄心がなく、野心もなく、競争心もない。ただ春夏秋冬に訪れる季節の気配をへこまない良い贈り物として受け取る心があるだけだ。

思えば、われわれ自身も〈季節〉のなかにいる、と自覚することで、どんなに日々の無感動な惰性的生活から救われていたことだろう。いま冬だと思っただけで、もう日常のルーティーンの外に出ることができるのである。

（「生きて愛するために」株式会社メタログ 一九九四年）
我々が教材研究をする場合、ややもすれば分析的な読みを重視しがちだが、右のように作品との感覚的な出会いを出発点とし、そこから丁寧に自分の思考を追っていくという読みも重視しなければならぬ。辻邦生のような読みを我々は学習指導の課題として設定する必要がある。

*

ここで視点を変えて、この文章が後世の我々に与えた影

響について考えておきたい。日本で成人した人物に、「春は」と尋ねたら何という答えが返ってくるであろうか。

四季に恵まれた日本で、季節感を読み込んだ歌や言葉は多い。中世の宗教界の指導者として有名な道元禪師の歌は春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけりというものである。四季それぞれを代表するものを詠み込んだ歌だが、三十一文字という制約があり、初句として「春」を除けば三文字しか残っていない。しかし、「春は花（桜）」と言い切っても、春を代表するものとして時代を問わず日本人のほとんどが認めるところである。道元禪師の歌は四季の風物を並べ、四季それぞれが持っているすばらしさを提示したものである。風物によって四季の美しさをとらえることは一般的に認められることであろう。

ところが、枕草子の場合、風物ではなく時間によって四季の良さを指摘した点にその独自性や特徴がある。しかも、四季のすばらしさを時間によって限定すれば、それに続く内容は風物でも人事でも包括しうるという利点を持っている。そういう物事のとらえ方や提示の仕方を我々に示した点に、その価値が認められよう。また、「春は」という問い掛けに、一見結びつかない「あけぼの」という答えを用意し、物事は様々にそして面白く表現できるのだということを示した点にも価値を見いだせるように思う。

四

次に、この文章を教材として扱う場合、どのような点に学習課題を見いださうか、考えてみたい。

最も大切にしなければならぬことは、学習者にこの教材を読ませる意義である。学習者が生きていく上で、この教材のどこがまた何が有効なのか考えておく必要がある。

一つに、四季を意識化させた点であろう。確かに、我々は四季の中に日常生活を営んではいる。しかし、四季のあることに感謝したり、辻邦生の言うように歓喜をもって四季を迎えたりはしていないのではないか。四季に感謝し、歓喜をもって迎えるには、人間としての経験の蓄積が要るように思う。つまり、老年になれば自ずと四季を迎える感覚が豊かに敏感になっていくのであろうが、概して若年の時は人事や身の周りのことに興味がいき、四季の面白さを目を向けることが少ないと言えよう。四季そのものを意識化させる点で有効である点をまず挙げたい。

二つ目に、作者の感覚の鋭さが挙げられる。四季の良さや面白さを「時」でとらえる感覚は誰もが持ち合わせている訳ではない。また、一瞬の美をとらえる目や刻々と移り変わる情景美を列挙できる感覚は、作者独自のものと言つてよい。しかも、言われてみると「そのとおり」「なるほど」と納得させられる点や面白さを含んでいる。

三つ目に、表現の的確さや巧さが挙げられよう。表現はどのような表現でも効果を要求する。「春はあけぼの」と言い切る表現は、読む人の心に強烈なインパクトでもって迫ってくる。また、「やうやう白くなりゆく、山ぎはすこし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」と刻々と移り行く情景の美を、これほどの言葉数で表現できる力量は作者独自のものである。しかも、情景をイメージし易い言葉で表現している。

四つ目に、構成に対する配慮である。四季の良さを時で切り取り、それを並列にしていることは読んですぐに分かることだが、第一文と第二文以下の文章の関係を「結論と説明」の関係で統一している。全体の構成を非常に明確な形で読者に提供している点に作者の工夫がある。また、細かく見ていくと、夏の条などは「月」と「闇」を逆転の発想で対比させ、その両者と「雨」とを二重に対比させている。以上、様々な学習課題が見いだせるが、その他の細かい点は次回の「教材研究と教材の扱い方」で示したい。